

近代オリンピックの形成におよぼした“ギリシャ オリンピック”の影響に関する研究

真 田 久¹⁾

Effect of the Greek Olympics upon the constitution of the modern Olympics

Hisashi Sanada¹

Abstract

Greek people celebrated their own Olympic Games after independence from Turkey. It was in 1859 that they celebrated the first Olympic Games at Athens. They also celebrated it in 1870, 75 and 89. And they held Panhellenic Games in 1891 and 93.

Most of the historians have ignored the importance of these Greek Olympics. They have said that Greek Olympics had been local festivals and nothing to report. They misunderstood the truth, because thirty thousand people came to the stadium to watch the revival of the Olympic Games in 1870. It was not a local festival. Most of the historians did not investigate the Greek historical reports and materials, and they could not find the truth. It was D. Young that found the importance of Greek Olympics with the Greek historical materials. The author of this paper has also investigated some Greek materials, especially Chrisafis' book "Modern international Olympic Games (1930, Athens)". The following conclusions were derived;

- 1) Greek Olympics were held as a revival of the ancient Olympic Games.
- 2) The experience of these Greek Olympics made the first modern Olympic Games successful.
- 3) Coubertin knew the Greek Olympics, but did not recognize the importance.
- 4) Greek people insisted that Olympic Games should be held in Greece forever, because they had celebrated the Greek Olympic Games at Athens.
- 5) Greek people much contributed the revival of the modern Olympic Games as a result.

Key words: modern Greece, Greek Olympics, Olympic history

(Japan J. Phys. Educe., 36: 97-104, September, 1991.)

キーワード：近代ギリシャ，ギリシャオリンピック，オ
リンピック史

緒 言

ここに本研究の出発点を成す1896年の2つの新聞記事がある。いずれも“The Times”に掲載されたもので、オリンピック競技会の開催地をめぐるギリシャ側とCoubertin(1863-1936年)の対立する意見を載せている。

「こうして祭典は成功裏に幕を閉じた。数日の悪天候にもかかわらず、水上競技以外のすべてのプログラムは首尾よく実施され、皇太子(筆者注：ギリシャ皇太子Constantinus)や彼と共にはたらいた人々は、彼らの仕事が成功裏に運んだことに満足した。来訪者たちは皆、祭典の素晴らしい秩序正しさ、大観衆の模範的な態度や、勝利した外国の競技者たちへの称賛に見られる騎士的な態度に感動していた。将来アテネ

1) 福岡教育大学教育学部

〒811-41 福岡県宗像市赤間729

1. *Fukuoka University of Education, Faculty of Education, Akama, Munakata, Fukuoka, (811-41)*

はオリンピック競技会の恒久的な場所になるであろうと広く望まれている。既に国際競技委員会により、1900年の競技会の開催地にパリが選ばれているが、公式の決定は出されていないので、アテネ市民たちの無上の要求は十分に認められるであろう。文明国家間の平和と友好は、いろいろな大きな都市で開催することにより促進される、と会議で広く出された考えは注目に値する。しかしアテネには特別の魅力があり、他の場所にはスタディオンがないのである。最善の方法は、競技会を2年毎にし、アテネと、他のヨーロッパやアメリカなどの都市とで、交互に開催することであろう。このようにすれば、委員会の計画を進めながら、競技会はヘレニズムの特徴を維持することができるであろう。」(THE TIMES; 1896年4月16日)

「タイムズ編集者殿；ヨーロッパの新聞では、今後オリンピックは、ギリシャに固定して行うと伝えている。そのようなことはない。2年前のソルボンヌに招集された国際会議で決定された通り、オリンピックは世界各地を回ることになっている。1900年にはパリで開催され、1904年には、ニューヨーク、ベルリン、ストックホルムのうちいずれかが、委員会で選ばれることになっている。わたしたちの計画は始められたばかりなのに、ギリシャ人がそれを、彼らの計画によって、独占しようとしているのは明らかである。しかし我々は、そのような計画に同意することはできない。アテネの人々はこれらのこと（筆者注：オリンピック競技会の復興）を見いだすことはなかったし、否定したのである。にもかかわらず、私としてはアテネでの競技会を望んだのである。輝かしい開催を見たばかりのこの事業を、断念する時が来ないことを強く望むものである。

編集長殿、最も分別のある私の気持ちを、理解していただきたい。

アテネにて4月23日 Bon. PIERRE de COUBERTIN, 国際オリンピック委員会会長」(THE TIMES; 1896年4月30日)

前者の記事は第1回オリンピック競技会の閉

幕について述べたものであり、当時、アテネを近代オリンピックの恒久的開催地にしようとする議論が起こっていたことを示している^{#1)}。後者はそのような議論にたいするCoubertinの意志表明であり、引き続きアテネでオリンピック競技会を開催することに強く反対している。その根拠として、もともとギリシャ人は、オリンピック競技会の復興など考えもつかなかったばかりか、反対さえしていたのだと彼は述べている。このCoubertinの見解は、オリンピック競技会の運営に携わったギリシャ人を驚かせ、また怒らせたのであった。なぜならば、彼らはオリンピック競技会は当然アテネで行われるべきであるとする歴史的根拠を持っていたからである。すなわちそれは、1859年以来、断続的にアテネで行われていたギリシャ独自のオリンピック競技会開催の経験であった。Coubertinはそれを当時知らなかったか、あるいは知っているが無視していたと思われる。本研究は、こうした展望の下に、“ギリシャオリンピック”の成立過程を再構成し、その基盤に立って、それが近代オリンピックに与えた影響について論じようとするものである^{#2)}。その際、すでに筆者は近代ギリシャのオリンピック復興運動について発表している^{#3)}ので¹⁰⁾、この点については簡単に触れるにとどめ、オリンピック競技会をめぐるCoubertinとギリシャの確執を軸に論を展開したい。

オリンピック競技会をめぐるCoubertinとギリシャとの確執については、MacAloon⁶⁾が既に示唆している。MacAloonによれば、Coubertinは“ギリシャオリンピック”の存在を意図的に無視していたことを明らかにしている^{#3)}が、その一方で、“ギリシャオリンピック”は成功した競技会ではなく、1889年以後は途絶えてしまったとし、近代オリンピックの復興に与えた直接的な影響については明らかにしていない。しかしながら実際は、Coubertinが意図的に無視せざるを得ないほどに、その影響は大きかったと推論できるのであり、この点でMacAloonの説は不十分である。MacAloonは“ギリシャ

オリンピック”の史料については、イギリス人の古典学者 Mahaffy の報告⁷⁾を用い、ギリシャの史料は調べてなく、史料的に問題があると言える⁸⁾。本研究では、ギリシャのオリンピック委員会の報告書、新聞、さらにギリシャで発行された文献も史料として用いて、上記の点を明らかにしたい。

1. 古代オリンピック競技会 (Ολυμπιακοί Αγώνες) の復興

19世紀の初めにトルコから独立したギリシャは、Evangelis Zappas (1800—1865) の財産供与により、1859年、1870年、1875年に国家的な規模でオリンピック競技会を開催したのであった。なかでも、第2回の“ギリシャオリンピック”は、古代の風習を取り入れて開催され、古代のパナテナイア祭の競技場に、3万人に及ぶ観衆が集まり、当時の新聞は、真にオリンピック競技会が復興されたと称えたのであった⁵⁾。

最近の近代オリンピック史に関する研究では、近代オリンピックの復興は、Coubertin の発想のみに帰せられるものではなく、それより以前の様々な地域でのオリンピック復興の運動と関連して論じられる傾向にある。例えば、Lennartz⁴⁾は、古代オリンピックの終焉した393年から、近代オリンピックの復興した1896年までの間に行われて来たオリンピック競技会についての史料を提示しているし、Mandell⁹⁾は、17世紀前半のイギリスで、R. Dover によって定期的で開催された“Olympic Games”から、人類のオリンピックの復興運動が始められたとの見解を取っている。さらに MacAloon⁶⁾ (pp. 147—153) は、Coubertin が1888年より以前にオリンピックの復興を思いついたことを示す史料はないとし、一方で、1889年にCoubertin がイギリスを訪れた際に見学した“Olympic Games of Much Wenlock”が、Coubertin の考えるオリンピックの概念の形成に多大な影響を与えることになったのであり、それ故Coubertin の功績は、オリンピック競技会復興の考えを思いついたことではなく、その夢を実現した

ことにあると主張している。

ところで Mandell や MacAloon らは、1896年以前のオリンピック競技会として、“ギリシャオリンピック”についても言及しているが、その内容は不正確で混乱している。例えば Mandell は、その年代と種目に誤りを犯している。彼は1859年のレスリングの勝者は乳牛を連れて帰ったと述べている。しかし Chrisafis²⁾ (pp. 34—43) の示すオリンピック委員会の報告書では、この時のオリンピック競技会には、レスリングの種目も、乳牛の賞品もなかったのである。また1875年のマスト登りの種目について、Mandell⁹⁾は、「高いマストの先端には太ったがちょうが鳴いていた。それは、がちょうを一番早くつかんだ競技者の賞品であった」と述べている。しかしギリシャオリンピックにおいて、がちょうが賞品になったことはギリシャのオリンピック委員会の史料には見当たらないのである¹⁰⁾。また、MacAloon⁶⁾ (pp. 150—152) も1859年のオリンピック競技会の開催に至る経過に誤りを犯しているし¹¹⁾、最も盛大であった1870年のオリンピック競技会にはほとんど言及していない。そしてこれらの研究者は、これらの競技会をすべて小規模な、地方の祭り程度に過ぎなかったとしている。しかし例えば、第2回の“ギリシャオリンピック”の場合、外国に住むギリシャ人の参加もあずかって、3万人もの観衆を競技場に集めて行われたことは、決して「小規模な地方の祭り」とは言い難いであろう¹²⁾。

これらの誤りは、“ギリシャオリンピック”について論じる際に、ギリシャの史料を用いなかったことに起因すると思われる。その点については、MacAloon⁶⁾ (p. 234) が「現代ギリシャ語に通じた研究者が当時の新聞、雑誌、公文書、書簡などを調査したことはなかったため、ギリシャ人達がオリンピック競技会をどのように見ていたのかについて知ることができない」と告白している通りである。近代ギリシャにおけるオリンピック競技会について、詳細に記されたギリシャの史料は、オリンピック委員会の報告書や当時のアテネの新聞記事などを網羅して書

かれた, Chrisafis²⁾(1873—1932年)により出版された文献であろう⁹⁾。この書の前半部分は、ギリシャ独立以後から1896年のオリンピック競技会までの体育・スポーツの歴史であり、“ギリシャオリンピック”について詳細に記されている。ギリシャの史料を用いることにより、“ギリシャオリンピック”をどのようにギリシャ人は認識していたのかということとはもとより、それらの競技会の近代オリンピックへの関わりについても把握することができる。

ごく最近になり, Young¹³⁾により、ギリシャの史料を中心としながら、“ギリシャオリンピック”の概観が報告されるようになってきた。しかし Young は“ギリシャオリンピック”の重要性を主張しているが、“ギリシャオリンピック”と近代オリンピックとの空白の期間(1889年から1896年)についてはほとんど述べていない。この点が明らかにされて初めて、近代オリンピックに与えた“ギリシャオリンピック”の意味が確認されるのである。

2. 全ギリシャ競技会 (Αγώνες του Πανελληνίου) の開催

1880年代後半から、ギリシャでのオリンピック競技会は、I. Phokianosを中心にして運営されていく。1888年にZappasの遺産により、産業の促進を図るための展示会場ザッピオンが政府により建設され、この年の10月に農・工業の展示会とオリンピック競技会を開催する予定であった。しかし競技会については結局開催されなかったのである。そこで第3回オリンピック競技会の責任者であったPhokianosが、アテネ市内の彼の体育場(γυμνάσιον)において、そこに学ぶ生徒や客たちを中心としたオリンピック競技会を開催したのであった。

1891年3月Phokianosはアテネの主な体操クラブを合併させて、体育の促進と体育教師の養成、及び技術の向上を目指して全ギリシャ体育協会(Πανελληνίος γυναστικός Συλλόγος)を設立した。この協会は、設立の当初からアマチュア競技者の協会であると位置付けている(Chrisafis²⁾p. 134)。このことはCoubertinのア

マチュア競技者によるオリンピックの競技会の考えをそのまま受け入れる下地が整っていたことを示している。

全ギリシャ体育協会は5月30と31日に第1回の全ギリシャ競技会をPhokianosの体育場で開催した。この競技会では、亜鈴と棍棒による集団体操の実演の後、円盤投げ、棒による溝越え、平行棒、跳馬、マスト登り、棒高跳び、ボクシング、ランニング、綱登り、水平棒、走り幅跳び、石投げ、重量挙げ、綱引きの競技が行われた(Chrisafis²⁾pp. 135—136)。この競技会には国王Yorgios(在位1863—1913年)が来賓として出席し、この競技会の後援者になることを約束した。また当時の首相Deliyanis(在任1891—1893, 1895—1897年)も政府として協会后援することを申し出、女性の競技会を、Zappasの遺産により建てられた展示会場ザッピオン(ζάππειον)にて開催した。この首相は1895年に再選され、翌年のアテネ大会の開催に積極的に取り組んだのであった。

1893年5月14, 15日に第2回の全ギリシャ競技会が開かれるが、この競技会は1896年の第1回国際オリンピック競技会にとっても重要な意味を持つことになる。皇太子Constantinusが全ギリシャ体育協会に加わり、後援者になったのであった。彼は1896年のアテネ大会では、その開催に尽力し、大会委員長としても活躍するのであった。全ギリシャ体育協会会長のPhokianosも、アテネ大会の大会副委員長になるのであった。

またこれらのこの競技会において優勝した競技者の中には、1896年のオリンピック競技会においても活躍している。第2回全ギリシャ競技会で重量挙げに優勝したGouskosは、1896年のオリンピック競技会では砲丸投げで準優勝している。1889年の競技会と1891年の第1回ギリシャ競技会で優勝したS. Versisは、1896年には、円盤投げで準優勝したのである。また1889年の競技会を観戦し、1893年には平行棒で優勝し、体育教師としても活躍したChrisafisは、1896年にはPhokianosのもと、アテネ大会

の運営に与かるのであった。このように、“ギリシャオリンピック”や全ギリシャ競技会の果たした役割を考えると、Mandell⁹⁾らの述べる「アテネ市民は競技の伝統を持ち合わせていなかった。人々にとってそうした出来事は、町の愉快的な祭りに過ぎなかった」とは断定できないであろう。近代オリンピックのアテネ開催の準備はこのようにして、ギリシャ国内の中で既に整いつつあったと言える。

3. 第1回近代オリンピックのアテネ開催

1894年6月16日より24日までパリ会議が開かれ、最終的に近代オリンピックの第1回大会の開催地にアテネが選ばれた。当初Coubertinは、第1回のオリンピック競技会を1900年にパリで開きたいと考えていたのであった。1894年パリ会議の始まる前日、つまり6月15日付けの“Revue de Paris”に「オリンピック競技会の復興」と題したCoubertinの寄稿文にそのことが宣言されている。それがパリ会議でアテネに変更になった経緯についてCoubertinは、「D. Vikelasと話しているうちに、わたしの考えが変わったのである。彼は責任の重大さに心痛したものの、その祖国ギリシャをあえてこの冒険に引きこもうと考えていた。こうしてわれわれはお互いに勇気づけ合いつつ、ついにアテネに決心した」（ディーム³⁾p. 27）と述べている。つまり、アテネでの開催の決定に、初代の国際オリンピック委員会（IOC）の会長になるギリシャ人Vikelas（1835—1908年）が、Coubertinや会議の参加者に働きかけたことが示唆される。Vikelasは当時パリに在住していたが、ギリシャでのオリンピック競技会の開催が決まると早速アテネに出かけた。1894年10月にザッピオン委員会（Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων¹⁰⁾）とオリンピック競技会の開催に向けての交渉を行うが、彼らは競技会に否定的な立場を取っていた。当時のギリシャ政府（首相Trikoupi在任1882—1885、1893—1895年）は、国家財政の逼迫のため、競技会開催の余裕はないとの立場であり、それに同調していたのであった。同年11月にCoubertin

もアテネでザッピオン委員会のS. Dragoumisに会うが、はっきりとオリンピック競技会の開催を否定されたのであった。Trikoupiの基本的な政策は、国内産業の育成と国家負債の削減であった。当時のギリシャの国家収入の3分の1は外国への借金返済に充てられる状態で、1893年Trikoupiは国家の破産宣言を行うほど財政は逼迫していたのであった¹²⁾。1880年以来ギリシャは二つの政党が勢力を争っていたが、一方のDeliyanisの率いる政党は、「汎ヘレニズム」のスローガンを掲げていた。この意味は外国の手に渡ったギリシャの領土を奪還するということを示していたが、このような方針は、オリンピック競技会の運動と結び付きやすかったと言える。

Coubertinがパリに帰った後、Vikelasはオリンピック競技会の開催に積極的な王室の一員、Contantinus皇太子に接することができ、その実現に向けての組織委員会を結成したのであった。Contantinusは資金集めにも奔走し、海外在住のギリシャ人に寄付を要請し、コンスタンチノーブル、ロンドン、マルセイユ、アレクサンドリアに住むギリシャ人から多額の援助を取り付けたのであった。一方Coubertinは、アテネ大会の準備にあまり関与していなかったようである。Young¹⁴⁾（p. 91）によれば、この頃のVikelasのCoubertin宛の書簡には、競技会の運営について指示を仰いだもの、アテネへの来訪を要請したものが多くあるが、Coubertinからの返答がなかったため、1895年1月31日の書簡には、ギリシャ人で準備を開始する旨が述べられている。

4. “ギリシャオリンピック”と近代オリンピック

アテネでの大会が近づくにつれて、Coubertinとギリシャとの確執が表面化してくる。Coubertinがアテネに到着した日に“Αδελφία”紙のインタビューを受けたCoubertinは次のように答えている。「今日の多くの人々はオリンピック競技会の復興はギリシャ人自身の手によるものであると主張している。しかしながら、

ソルボンヌで私がオリンピック競技会の復興を提唱した1892年11月25日より以前に、その考えを表明した者はない。その考えを想定した多くの意見はあっても、それを表明しなかったという事実において、明らかな相違がある。Tarassoules¹¹⁾。Coubertinはギリシャの世論に当初から挑戦的であった。大会の表彰式の場で、アテネでの永久開催の要請がギリシャの王室より出された。アメリカ選手団やアテネ在住のアメリカ人による、同様の陳情書も出された。それに対してCoubertinは孤立したが、席上「何も解らぬ愚者を装うことにし」て、無視したのであった。(ディーム³⁾p. 44)その後Coubertinは、前述の“The Times”ではっきりと彼の見解を述べたのであった。彼の見解は大会の開催に尽力したギリシャ人を驚かせた。Vikelasは5月19日と6月8日付けでCoubertinに抗議の書簡を出している。後者の書簡は次の内容である。

「始められたばかりの事業の進展を妨げるような性急さは、ともかく慎みましょう。それ以外の事は、ご存じのように、これまで通り声高に叫び続けていきます。つまり、Coubertin男爵なくして、いかなる国際オリンピック競技会も在り得ないと言うことです。しかし私は最初に話したではありませんか。Zappasによってここで始められたオリンピック競技会のことを…(中略)…国際オリンピック競技会の確立の名声はあなたのものです。しかしギリシャにおいてオリンピック競技会が行われていたという事実はそれでも残るし、何人もその名前を消し去ることはできないのです。誰もアテネの競技会から“オリンピック”の名を否定する権利はないのです。」(Young¹⁴⁾p. 94)

ここで明らかなことは、CoubertinはZappasによって始められた“ギリシャオリンピック”の存在をかなり以前からVikelasによって知らされていたという事である。Coubertinはその価値を認めていなかったのである。Vikelasはその後国際オリンピック委員会の中で、中間オリンピックのアテネ開催を積極的に働きかけ

てゆくのであった。

結 語

近代ギリシャの歴史を検討すれば、“ギリシャオリンピック”の開催の経験が、第1回の近代オリンピックを成功させた大きな要因であると言える。Zappasの財産供与によるオリンピック競技会と、その後Phokianosによって開催された全ギリシャ競技会などにより、1896年の大規模なオリンピック競技会開催の下準備がなされていたと言える。特に1889年の“ギリシャオリンピック”とその後の全ギリシャ競技会は、役員と選手の面についても、アテネ大会を支えている。これまでの近代オリンピック史では、1896年のオリンピック競技会復興に関するギリシャの要因については、ほとんど検討されて来なかった。それは近代オリンピックの歴史が、Coubertinの側からのみ語られる傾向にあることに起因する。それ故、近代オリンピックの復興に対するギリシャの態度は極めて受動的なものであったとされてきた。1896年当時のアテネは経済的にも政治的にも決して安定した国家ではなかった。そのような中で第1回のオリンピック競技会をアテネで開催し、成功させたのであり、その要因について十分に歴史的に解明されなければならないのである。その後のオリンピック競技会にもギリシャは積極的に関与していった¹¹⁾。それは単なる古代への誇りだけではなく、近代ギリシャの中にその因を見つけ出す事ができるのである。しかし近代ギリシャで行われたオリンピック競技会はCoubertinらから決して評価される事はなかった。むしろそのようなギリシャ人のオリンピック競技会復興の誇りが、Coubertinとの確執を生じさせたと思われる¹²⁾。近代オリンピックの復興に果たしたCoubertinの功績は動かしがたい。しかし、第1回の近代オリンピックをアテネで行うことができた経過を追究すれば、Zappas, Phokianos, Vikelas, Constantinusら、ギリシャ人のオリンピック競技会の復興に関わった功績も、見直され、評価されるべきであろう。

注

- 注1) 同年4月16日付けの“New York Times”には、CoubertinとConstantinusが話し合った結果、次回のオリンピック競技会もアテネで開催されることになったと報じている。
- 注2) 本研究では、近代ギリシャで行われていた独自のオリンピック競技会を、近代オリンピックとの混同を避けるために、前者を“ギリシャオリンピック”と名付けるものとする。
- 注3) Coubertinによる「オリンピック競技会の序」を記載した評論誌“Cosmopolis”(vol. 2, 1896)には、“ギリシャオリンピック”についての記事も載せられており、Coubertinの目に触れていたはずである。またギリシャがそれらの競技会を根拠にして、アテネでのオリンピック競技会の開催を主張していた頃、Coubertinは“ギリシャオリンピック”について「よく覚えていない」と曖昧化して述べている。(MacAlloon⁶⁾pp. 150—152)
- 注4) Mahaffyの報告は、明らかに“ギリシャオリンピック”を揶揄している。例えば“Heranodikai(競技委員会)”“Olympionikes(オリンピック勝者)”などのギリシャ語が使われているのは場違いであるとしているが、ギリシャ人は古代とほぼ同じギリシャ語を日常的に使っているのであり、自国語に過ぎない。また会場になった、古代の競技場を「楕円形の巨大なシチュー鍋」、円盤を「パン皿」、槍を「箒の柄」としている。さらにMahaffyは、ギリシャ語を取り違え、誤った競技種目を伝えている。
- 注5) 1870年11月16日付けのアテネの新聞“Αθήθεια”, “Αίον”, 及び11月17日付けの“To Mέλλον”による。いずれもこの競技会の成功を伝えている。
- 注6) Mandellは1859年の“ギリシャオリンピック”と混同していると思われる。59年のマスト登り競技では、時計、絹のベルト、絹のハンカチ、ウィングラスと銀の燭台がマストの上に置かれていたことが新聞(Αίον 1859.11.16)で報じられている。しかしながら、がちょうが賞品となったことはない。
- 注7) MacAllonは、Zappasによって農・工業の展示会と組み合わせた競技会の定期的な開催が提案されたが、農・工業の展示会は開かれなかったと述べている。事実上、Zappasはオリンピック競

技会の単独開催を提案したが入れられず、展示会の一部として競技会が行われたのであった。

- 注8) 1870年のアテネの人口は約8万人であり、ギリシャ全土とは言え、3万人の観衆をアテネの競技場に集めたことは、競技会の盛況ぶりを示していよう。国際オリンピック競技会においても、3万人以上の観衆を一度に集めたのは、第1回アテネ大会(5万人)を除外して1924年のパリ大会以前には存在しない。しかしながら、この競技会については正しく評価されて来なかった。Bourdon¹⁾は、「(1870年の)オリンピック競技会は、スポーツ競技と言うより田舎の娯楽に過ぎない。ギリシャオリンピックは存立できるものではないことを2回のオリンピックが証明した。世界を動かしたのはフランスの声明であった」と述べている。前述したMandellもBourdonの言をそのまま引用している。
- 注9) この著書を邦訳すれば、「近代国際オリンピック競技会」である。著者のChrisafisは、1889年の競技会に選手として参加したことのある学者であるが、当時のオリンピック委員会の公式報告書、競技実施の規程、競技会の予算や当時の新聞の競技会についての報道記事などを豊富に用いて、ギリシャにおけるオリンピックの競技会の復興の歴史を詳細に記している。
- 注10) ザッピオンの設立とともにつくられた委員会、1888年の“ギリシャオリンピック”を主催する予定であったが、前述したように競技部門は行なわれなかった。
- 注11) 1904年のセントルイス大会に、ギリシャは13人派遣しているが、これはドイツの20人に次ぐものである。この時イギリスとフランスは派遣費が出ないとの理由で一人も参加していない。また、Lucas⁵⁾によれば、1906年のアテネでの中間オリンピックの大成功は、1900パリ大会、1904年セントルイス大会の失敗によって失われたオリンピック運動への信頼を回復させたのであった。
- 注12) Coubertinとギリシャとの対立は、1906年にアテネで開かれた中間オリンピックの時に際立っている。Coubertinはこの競技会に出席しなかったが、アテネに集まったIOCの委員で、IOC組織の改革とギリシャ皇太子ConstantinusのIOC名誉会長への推薦を決定した。しかしCoubertinはIOC会長の権限で、これを否決した(ディーム³⁾pp. 36—87)。

文献 (References)

- 1) Bourdon, G. (1924) Athenes essaye de faire revivre Olympie. In : comite olympique français (Ed.), Les jeux de la VIII Olympiade, Paris, pp. 19—21.
- 2) Chrisafis I. (1930) Οι δυνυχρόνοι διεθεις αγώνεις. Typois Segiadriou : Athens.
- 3) ディーム : 大島謙吉訳 (1962) ピエールドクーベルタン : オリンピックの回想. ベースボールマガジン社 : 東京. <Diem C. (1959) Pierre de Coubertin : Olympische Erinnerungen (2nd ed.). Wilhelm Limpert-verlag : Berlin.>
- 4) Lennarts, K. (1974) Kenntnisse und Vorstellungen von Olympia und den olympischen Spielen in der Zeit von 393—1896. Verlag Karl Hofmann : Stuttgart.
- 5) Lucas, J. (1980) The modern Olympic Games, South Brunswick : New York, 1980, p. 56.
- 6) MacAloon, J. (1981) This great symbol : Pierre de Coubertin and the origin of the modern Olympic Games. The university of Chicago Press : Chicago and London.
- 7) Mahaffy, J. (1875) The modern Olympic Games at Athens at 1875. Macmillan's Magazine 36 : 324—327
- 8) Mandell, R. (1976) The first modern Olympics. Berkerly : New York, pp. 30—35.
- 9) Mandell, R. (1984) Sport : A cultural history. Columbia University Press : New York, p. 199.
- 10) 真田 久 (1990) 近代ギリシャのオリンピック復興運動, 体育の科学 40—5 : 391—396.
- 11) Tarassoules (1988) Olympic Games at Athens. Tarassoules : Athens, p. 22.
- 12) Woodhouse, M. (1986) Modern Greece : A short history. Faber and Faber Limited : London, pp. 172—176.
- 13) Young, D. (1987) The origin of the modern Olympics. The International Journal of the History of Sport 4—4 : 271—300.
- 14) Young, D. (1988) Dementrios Vikelas : The first president of IOC, Stadion 14—1 : 85—102.

(平成2年4月23日受付)